教えの庭から

空気を拝む

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道

見えない空気には、「空気を読む」という言葉があり、見えないその場の雰囲気を感じ取り、状況に応じて行動することを意味しています。一方、「空気を拝む」という言葉は、あまり聞きません。前にも紹介したことのある山田無文（むもん）老師（1900～88年）は、空気を如来様だと思って拝まれました。

老師は、修行時代に結核に侵され、自宅に帰られて療養を余儀なくされていた頃に、ある朝、ふと障子を開けて、ぬれ縁に出られた時に、風が吹くのを感じられました。そして、「いったい風とは何だろう」と考えられ、「空気がうごいているんだ」とわかると、「空気！　そうだ！　空気というものがあったんだなあ」と感動され、抱かれたおもいを次の詩に託されました。

「大いなるものに抱かれあることを、今朝吹く風の涼しさに知る」

と詠（うた）われています。（「むもん法話集」、春秋社）

無文老師は、空気に「大いなるもの」つまり如来様を感じられて拝まれました。その後、無文老師の結核は治り、修行が完成し、妙心寺派管長、花園大学学長などを歴任されました。

挿絵　平尾恵郷

私たちの体は、呼吸により空気を吸い込み食べ物などの栄養を酸素で燃やし、エネルギーを取り出しています。つまり、生きていくために必要なエネルギーを取り出すために、空気中の酸素を呼吸で取り入れ、燃えかすとなった二酸化炭素をはき出すために呼吸をしています。

生物学の授業を受けている時、今息している空気は、口の中に入ったら、自分の空気になるのか、肺に入ったら、自分のものになるのか、外と限りなくつながっているように思えて、どこからが自分のものだろうかと不思議に思ったことがありました。今思うと空気は限りなく自分を抱きしめていてくれていると思えます。

この空気の働きは、如来様の働きとよく似ています。観無量寿経（かんむりょうじゅきょう）には、「如来の光明は、遍（あまね）く十方の世界を照らして、念仏の衆生を摂取（仏が衆生を救うこと）して捨て給わず」とあります。

如来様は、光となって、念仏する衆生をすべて抱きしめておいでです。無文老師は、空気に如来様を感じられていたのです。それは生命そのものであり、それが私たちの呼吸となって「いき」する時、それが私たち自身の「いき」る根源となり、いわゆる「生きる」ことは「いき（呼吸）する」ことであり、如来様と一つに連なっていたのです。だから、私たちは、自分で生きているのではなくて、空気・如来様に生かされているのです。

しかし、私たちが生きているということは、空気のほか、水、食べもの、着るもの、家族、社会の人たち、地球、太陽など自分以外のすべてのものの支えを受けています。つまり私たちは、自分一人で生きているのではなく、私以外のすべてのものによって生かされています。そのことに気づいた時に出てくる如来様への感謝の言葉が「おかげさま」なのです。「おかげさま」のことを難しく言えば、「無自性」あるいは「無我」と言います。

1月7日付の本紙「こだま」欄の「出西窯を開いた5人の若者」（坪倉明美さん）には、若者たちが「無自性」という言葉を支えに、苦難に出会ったにもかかわらず、閉窯することなく、窯を大きく発展させたことが書かれていました。